

「宇喜多秀家と鼻塚」の考察

丸谷憲二

1 はじめに

鼻塚(耳塚)は、豊臣秀吉の朝鮮出兵(文禄・慶長の役 1592 年・1598 年)で殺した朝鮮・明国人の耳や鼻をそぎ落とし持ち帰り葬った塚である。備前市香登に千(百)人鼻塚がある。宇喜多秀家と鼻塚との関係を考察したい。



2 京都の鼻塚

豊国神社(京都市東山区塗師屋町)門前にある。2 万人の耳と鼻が埋められている。慶長 2 年(1597 年)に築造され施餓鬼供養が行われた。施餓鬼供養は秀吉の意向によるものである。戦功の証としての首検分が、鼻耳に変更され帰国中の腐敗防止のため塩漬にして持ち帰った。明治から昭和 20 年までは「朝鮮征伐」、現在は「朝鮮出兵」と表記されている。

1597 年 1 月 1 日 秀吉、朝鮮再侵略を命令する。

2 月 21 日 秀吉、再侵略の部署を下達。総勢 141,500 人。

6 月 14 日、柳川調信、秀吉の「鼻斬り命令」を諸将に伝える。

9 月 12 日、耳鼻十五桶、京都に着く。

9 月 28 日、秀吉、鼻塚を築き供養を行う。

2.1 朝鮮の記録『懲毖録』59 賊が南方に退く

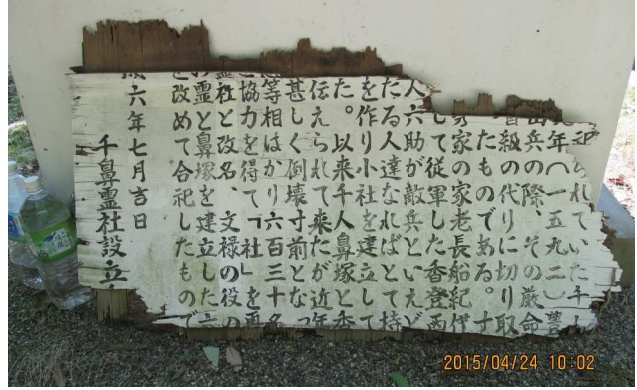
賊兵が退いた。その時、賊は、三道を蹂躪した。その通過する所では、みな、家屋を焼き払い、人民を殺戮し、およそわが国の人を捕らえれば、ことごとくその鼻をそいで威を示したので、(賊)兵が稷山に至るや、都城(ソウル)の人々は皆逃れ散った。

2.2 日本の記録『都名所図会』巻の三

耳塚は(方広寺の)二王門の前にあり。文禄元年(1594 年)朝鮮征伐の時、小西摂津守、加藤肥後守を大将として数万の軍兵を討取り、首を日本へわたさんこと益なければ、耳切鼻切して送り、この所に埋み、耳塚という」

3 備前市香登の千人鼻塚と千鼻霊社

宇喜多秀家の家老長船紀伊守の旗持ちだった長吏六助と新兵衛が朝鮮出兵から帰国後、持ち帰った塩漬の鼻を葬った塚説がある。「六助の子孫が受け継いで供養を続けてきた」と山田良三氏は説明される。鼻数は百人～六万人説がある。



3.1 疑問点

宇喜多秀家は文禄の役の総大将、慶長の役は監軍としての参加である。秀吉より「鼻斬り命令」が発令されたのは1597年の慶長の役である。慶長の役の総大将は小早川秀秋（後の岡山城主）である。家老長船紀伊守の指示による持ち帰りとなる。

3.2 宇喜多秀家の朝鮮の記録『懲毖録』

この時、倭将で都城(ソウル)にいた者は平秀嘉(宇喜多秀家)で、・・・年が若くて軍務をとりしきることができず、実権は(小西)行長がもっていた。そして(加藤)清正は咸鏡道にいてまだ還らなかつた。

3.3 宇喜多秀家の朝鮮の記録『看羊(かんよう)録』

壬申の役には、京師(ソウル)の南別宮に侵入し、かなり殺掠(さつりやく)を禁じたが、わが国の若い男子を多数生捕りにして帰った。

4 まとめ

秀吉の「鼻斬り命令」は1597年であり、『都名所図会』の1594年は間違いである。西川宏氏は「看羊録によると秀家は戦場において朝鮮人非戦闘員の殺害や掠奪は抑えたが、その代わりに多数を生捕りにし、特に年少の男子を連れ帰った。」と説明している。宇喜多秀家の天道説からも秀吉の「鼻斬り命令」に従うとは考えられない。備前市香登の千(百)人鼻塚は家老長船紀伊守の指示による持ち帰りとなる。

岡山県での宇喜多氏研究の遅れは日韓関係への配慮と考えている。宇喜多秀家を表に出すと、慶長の役の総大将の小早川秀秋（後の岡山城主）も同時に表に現れる。共に岡山城主である。豊臣秀吉の朝鮮出兵の目的と行為を明確に説明できないと、二度の朝鮮出兵の総大将が岡山県人であり、外交問題のリスクを研究者が敬遠したと考える。しかし、韓国資料のデジタル化と資料公開も進展しており比較検証できるようになってきている。

5 参考情報

『懲毖録』に、「このように強制連行された数は約五万人、徳川家康との間に講和が成立して帰国できた者の数は、五分の一の約一万人に過ぎなかつた。」と記録している。

『懲毖録』に、「人さらい、強制連行についても、多くの記録がある。』『朝鮮日々記』
 「(慶長二年)11月19日・・・日本よりも万の商人もきたりしなるに、人商売せる者来り、奥陣よりあとにつ

きあるき、男女老若買い取りて、縄にて首をくくりあつめ、先へおひ立て歩み候わねば、後より杖にて追い立て打ち走らんす。・・・かくの如く買い集め、・・・」

エスパニア人の商人アピラ・ヒロンの『日本王国記』にも「捕虜は実に安い値段だった。」

フロレンス人のフランチェスコ・カルレッティも『見聞録』に「ひどく安い値段で売り払われていた。」と記録している。

参考文献

- ①『岡山と朝鮮－その2000年のきずな－』西川宏 昭和57年 日本文教出版 p85-87
- ②『備前を歩く』前川満 平成12年 日本文教出版 p142-143
- ③『懲毖録』東洋文庫357 柳成竜 1979年 平凡社
- ④『牛窓町史 通史編』平成13年 牛窓町史編纂委員会 牛窓町
- ⑤東洋文庫440『看羊(かんよう)録 1654年刊行』姜沆 朴鐘鳴訳注 1984年 平凡社